

9
vol. 247

広報 縄文村だより vol. 247(9月号)

Jomon Times

令和8年9月1日
●編集・発行●
奥松島縄文村歴史資料館
東松島市宮戸字里81-18
TEL 88-3927 FAX 88-3928

縄文の知恵を学ぶ！ ～縄文教室・土器作り～



縄文の暮らしを肌で体感する全3回コースのイベント「縄文教室」。開館当初から続いているイベントで、今年も7月18日(土)・19日(日)に第1回の土器作りを開催しました。自作の縄文土器作りに挑戦する「通常コース」と、2日間かけて実際に遺跡から出土した縄文土器の再現を目指す「本格コース」に分かれ、計40名が参加しました。さて、今年の土器の出来栄はどうなるでしょう？



理想の土器をめざして【通常】



▲粘土を貼り付け立体的な装飾に



▲「縄文原体」で縄目をつける

通常コースでは、はじめに土器作りのスペシャリスト・元東北歴史博物館上席研究員の菊地逸夫先生から土器作りのコツを説明いただき、いざスタート！底になる部分をつくったら、粘土ひもを一段一段丁寧に積み重ねていきます。小さなお子さんから大人のみなさんまで一心不乱に粘土をこねこね自分だけの土器を形作っていました。超個性的な土器にチャレンジしていた人も！

土器の形が出来上がった次は文様づけ。縄文土器の由来にもなった縄目文様を付けたり、粘土ひもを貼り付けてグルグル文様を付けたり、皆さん楽しみながら思い思いの装飾をほどこしていました。

クオリティにこだわる【本格】

本格コースは、これまでに何度も土器を作った経験を持つ土器作り上級者の集まり！再現を目指す縄文土器の図面や写真だけでなく、実物により近づけるために計測器具を持参して大きさを測りながら作っている方もいらっしゃいました。整った美フォルムの土器、精緻な文様を見た通常コースの方からは「レベルがちがう…」という声が聞こえてきました。ただ、作ったご本人は「ここがうまくいってないんだよねあ…」とまだまだ納得がいていない様子。縄文人の技術力を改めて実感しつつも、素晴らしく完成度が高い作品が並びました。



▲細かな文様を刻み込む

こちらも
チェック→

facebook



Instagram



HP

シリーズ
第64回

東松島の教育を語る

令和8年度第二学区の小中連携教育
児童の憧れや意欲育む取組

■問 教育総務課教育指導係 ☎内線1253

東松島市の第二学区(矢本第二中学校、大曲小学校、赤井小学校、赤井南小学校)ではカリキュラムや行事、生徒指導などを小学校と中学校で連携して行う「小・中連携教育」を展開し、義務教育9年間を見通した切れ目ない教育につなげています。

特に力を入れているのが、小学校から中学校への進学時に、学習や生活・人間関係など環境の急激な変化に対応できない、いわゆる「中1ギャップ」の解消・緩和です。第二学区では主に小学6年生に対する取り組みを強化しています。例えば矢本二中教員が赤井、赤井南、大曲の各小学校に出向き、6年生向けに授業を行ったり、入学前の3月に3校の児童を混合した模擬クラスを編制して、中学校舎で模擬授業の展開などを行っています。

また矢本二中で生徒主体で行う中総体壮行式に、3校の6年生を招き、空気感を感じてもらったり、文化祭前の合唱コンクールリハーサル(10月15日予定)の見学も行っています。

「一番大切なのは、児童の皆さんに自身の中学校生活をイメージしてもらうことだと思います」。そう話すのは矢本二中の曾田晋一校長。「一生懸命、学校行事に取り組む先輩たちの勇姿を間近で見せることは児童の憧れや意欲につながります。小中連携教育の意義はここにあると思います」と語って

いました。

また第二学区の特色ある取組として、「矢本二中」にちなんだ、2の日運動もあります。例えば「にこにこ笑顔で2割増しの挨拶」、「掃除の時間以外に2個以上ゴミを拾う」など、学校やクラスごとに目標を定めて実践しているほか、でめこん(デジタルメディアコントロール)の一環で、毎月2、12、22日に家族で話し合った目標(例・家族みんなで22分間読書をする、家事を2つ以上手伝うなど)の達成を目指しています。児童生徒の健全育成は学校、家庭、地域の協働が何よりも大切。子どもたちの自主性を育みながら、それを支える家庭や地域の輪も広がっているのが第二学区の強みであり、特色と言えるでしょう。



▲中総体壮行式で選手にエールを送る生徒会の応援団と、後方で見学する児童たち